

# 保育実践のパイオニア——氏原銀(1)

守隨香

一八五八年（安政六年）、江戸三田古川の青木藩邸で西山銀（後の氏原銀）は誕生した。父親は士族西山明教、母親は鉄といふ。母親は妊娠中、鬼子母神に安産を祈願したところ、神符に銀太郎と書いてあつたので、てっきり男の子だと思いつんでいた。生まれたのが女の子と知つて驚きはしたものの、両親は歓んでこの生命を迎えた。父親は宝蔵院流槍術や表層術が巧みで、更に詩作・謡曲など多才な

人物であつたらしい。また、贅沢をつつしみ、家族には徹底して服従させる厳格な父親であつた。

当時は、技芸の稽古を六歳の六月からはじめるのが上達の秘訣といわれていたから、銀も六歳の六月から早速、家庭で習字の稽古をはじめた。九歳になると詩吟も習つた。週一回、三〇余町（約三・五km）離れた稽古場へ通うのは、幼い銀には辛いことだったが、たびたび父親が銀をおぶつて夜道を歩い

たという。子煩惱なやさしい面もあつたのである。

母親は、諸礼式・折り方・結い方・生花などを銀に手ほどきしていた。池のほとりに咲く花に手をのばして池に落ちたり、メダカをとろうとして池に落ちるような活潑で男まさりな銀に、冷静で沈着な気質を養おうとしていたのだ。後述する銀の、大変に変動の激しい人生を眺望すると、この母親の願いどおりにはならなかつたと言わざるをえないが、厳しい稽古と両親の愛情が、体力・努力・精神力の支柱となつて銀を支えつけたことは確かである。

一八六八年、銀十歳の年に、日本は明治維新を迎えた。東京藩邸在住の家臣は皆、国元の攝州麻田村へ移る。大阪から北へ四里離れた麻田村へ、西山家も転居した。麻田村での生活が始まつた。十一歳になると銀は、父親から漢籍かんせきと楷書かいしょを習う。女子は料理・裁縫といった家事に関する手習いが一般的だつたから、男子と同等の学問をほどこす西山家の教育方針には嘲笑の声も高かつた。だが、その家庭教育員を募集しているという知らせを運んできた。氏原

が培つた銀の強い信念と父親への服従心で、ひたすら多くの習い事に励むことができた。両親、ことに父親が銀の人格形成に与えた影響は大きく深い。

一八七五年、十七歳の銀はチフスをわずらい、一時は重体にまでなる。幸い全快し、親戚を集めて盛大な祝宴が催された。北の新地から芸妓を呼び、料理人を招いたという逸話から、西山家の裕福さが想像できる。その後まもなく氏原知正との縁談がもちあがり、急進展する。実はこの縁談に銀自身は気が進まなかつたのだが、両親のすすめを受けて承知した。この年の秋、銀は結婚して氏原銀となる。夫は大阪医学校に在学中だつたため、舅姑に仕えて家事に専念する、銀にとつてはむなし生活が始まつた。幼い頃から両親の教育方針でさまざまな学問的素養を身につけてきただけに、家事に専念して家族に尽くす生活では満足できない人だつたのだ。

そんなおり、実父の知人が、西区の小学校で女教員を募集しているという知らせを運んできた。氏原

は喜々とした。が、嫁の立場として勝手なことは許されない。そこで実父が、妻の就労は勉学中の夫にとつて励みになること、また家事雇い人の賃金も教員棒給でまかなえるから心配ないことを理由に、氏原父を説得した。氏原父が実父の親心にうたれ、認めたおかげで氏原は、家事専業の生活から解放されて西区堀江小学校助教になれたというわけだ。女性が職業をもつことは、昔も今も、家庭生活によつて左右されることが多くあるものだ。この就職が保育への道についたのだから、日本の保育実践をきり開いた氏原銀は、家庭の事情と時の運によつて生み出されたといえるかもしれない。教員生活で必ずしも経済的に恵まれたわけではないが、広い知識と体験を生かすチャンスとなつたにはちがいない。

同小学校の訓導となつた氏原は、一八七八年、大坂府費で東京女子師範学校附属幼稚園（以下、附属幼稚園とする）へ、保育見習いに行くよう命じられた。辞令を出した渡辺府知事は「大阪は商業地だか

ら、子供の頃から正直といふことを叩きこまねばならぬ」<sup>①</sup>との考え方から教育を重要視していた人物で、附属幼稚園を参観して、ぜひ大阪にも幼稚園がほしいと考えたのだった。附属幼稚園に保母を派遣してくれるよう頼んだが、あいにく適當な人がなかつた。そこで大阪から小学校訓導を二名選んで、見習いに行かせることになった。この二名というのが、氏原銀と木村末である。大阪府内の小学校訓導中、なぜ氏原と木村が選ばれたのかはわからない。

ともあれ二人は、同年二月に上京した。道中での様子は『日本幼稚園史』<sup>②</sup>に記されている。二十歳の氏原はこの時すでに妊娠していた。周囲の者はもちろん、本人すら気づかないまま上京したのだが、もし出発前に事実が判明していたら、氏原は保育見習いを辞退したかもしれない。幼稚園草創期に普及の労をにない、発展に寄与した大いなる保母は、ここに存在しなかつたかもしれないのだ。

上京するとすぐに、附属幼稚園監事の関信三を訪

ね、到着を報告した。住まいは附属幼稚園保母近藤  
濱家となる。以来氏原は、公私にわたって近藤の指導・援助をうけるのである。

東京女子師範学校は大阪府に対し、保育見習い生の受け入れを約束したもの、これほどすぐに上京するとは予想外で、規定や時間割など何一つ準備をしていなかつた。一日も早く幼稚園をつくりたいと

急いだ大阪府側と、「ただ簡単に挨拶してしまった

丈けで<sup>③</sup>のんきに構えていた学校側が好対照でおもしろい。とりあえず形ばかりの入学試験を行い、正式に入学を許可してから登校日までの数日間に、あわてて必要な準備をととのえた。就学期間は、大阪府との間で六か月と決まっていたが、「到底六か月では物にならぬ」と判断し、十か月とした。ここにきて保母養成の重責を感じはじめた学校の姿勢とみていいだろう。

実施された科目は次のとおりである。  
(一) 内は指導者名

・実地保育

・音楽

(宮内省伶人)

・保育法

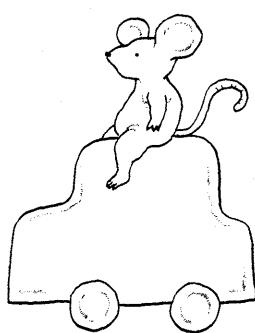
・幼稚園記並びに保育法

(松野クララ)  
(豊田美雄)

・手技製作

実地保育は附属幼稚園の保育に参加するかたちで

(近藤濱)



毎日行われた。そのあとで講義や実技指導がされたのだ。音楽は、唱歌と和琴があった。唱歌といつても幼児のためにつくられたものなどない。歌詞は翻訳の漢文調だし、曲も雅樂調ばかり。とても保育につかえない。それで、歌詞はほとんど創作に近いほど豊田・近藤が手を加え、伶人が作曲して唱歌をつ

くった。その上で伶人の実技指導をうけたのだから、唱歌を保育に用いるまでには相当の苦労を要したのだ。

松野の保育法は、フレーベルが考案した恩物の理解が主な内容だった。松野はドイツ人で、フレーベルの教えをうけた女性である。日本語が話せない松野の講義は、関が通訳しなければならなかつたら、二人がそろつて出勤しなければ休講になつてしまふ。実にはかどらない講義だったと、氏原は後に述べている。

豊田の保育法は、フレーベルの保育理論であり、近藤の手技製作も、やはり恩物の使用法であった。

保育見習いという形で行われたわが国最初の保姆養成教育は、幼稚園に恩物がいかに重要であるかを説き、恩物の使い方に熟達することに終始したといえよう。明治期を貫いた恩物偏重の保育思想は、この保育見習い教育と、後の氏原らの保育実践に源があるようだ。

一八七八年八月末、氏原は実母の出迎える大阪駅に、身重のからだで降りた。十ヶ月の見習い期間を中途で退学したのだ。自由のきかないからだで単身の旅だったため、近藤が並々ならぬ配慮をした。まず、附属幼稚園助手の山田某宅へ行き、大阪まで付き添いをしてくれるよう頼んだ。山田は承諾した。だが、往復の旅費が負担であることに気づいた近藤は、思い直して郵船会社へ出向く。同乗者の中に車中付き添つてくれる人がいないかと探したところ、幸い適任者が見つかったので、さっそく依頼に足を運んだ。そして改めて、今度は断りのために山田宅を訪ねたのだ。親切で献身的な近藤の人柄

は、明治期の日本の社会が求めた女性像と重なるばかりでなく、こと保姆の資質としても当時はそういった部分を最重要視したのではないだろうか。

無事に大阪の実家へ帰った氏原は、府立幼稚園取調兼第一番中学校勤務を申しかかる。中学校では国語科を担当したが、同年末までの短い勤務であった。

十一月、実家で男の子を出産する。本来ならば氏

原家にとっても喜びの初孫誕生であるはずが、上京してから妊娠がわかったことから氏原家にあらぬ誤解が生じ、氏原は不穏な空気の中で涙を流す日々が続いた。嫁としてひたすら忍耐し、誤解のとけるのを待つほかはなかつたのだ。

氏原が保育の先駆者として後々まで活躍することは次回に述べるが、仕事にうちこむかたわら、彼女は結婚生活にも翻弄していた。現代女性の多くが抱える「仕事と家庭の両立」という難題は、遠い明治に生きた一保姆の人生にも見出すことができる。

一八七九年十二月、大阪府に悲願の府立模範幼稚

園が開設した。園舎・園庭の設備は、大阪府の意氣込みを反映した見事なものだつた。一足先に帰阪していった氏原と、見習い期間を終えて帰つた木村とが

中心的に開設準備をしたことはいうまでもない。開設準備にあたつては、関が、帰阪する木村のため加筆・修正して手渡した自らの著書『幼稚園創立法』が、参考に役立てられた。

（お茶の水女子大学大学院）

#### 参考文献

①『幼児の教育』第26巻 7・8月号 P. 92

②『日本幼稚園史』臨川書店 一九三〇 P. 118, 120

③ 同右 P. 117

④ 同右 P. 119